

■ 論 文 ■

「性」を〈縛る〉  
－GHQ、検閲、田村泰次郎「肉体の門」－

塚 田 幸 光  
(関西学院大学法学部教授)

■ 要 旨 ■ 本稿では、占領期の有楽町という文化的、政治的コンタクト・ゾーンにおける「性」表象に関して、田村泰次郎の短編小説「肉体の門」(『群像』1947. 3)を軸に考察する。パンパン／私娼とは、社会が排除し、同時に必要悪として包摂した象徴的存在である。そして、パンパンが住まう有楽町は、GHQの政治的中心であり、敗戦と占領のトラウマを映し出すトポスだろう。だが、有楽町とパンパンを描く文学テキストにおいて、アメリカの「影」は排除されている。GHQの検閲は、メディアに括弧付きの自由を与え、民主主義を説く。しかしながら、検閲と民主主義とは、矛盾する概念であり、その捻れは「不在の米軍」に照射されるのだ。では、この不在のワンピースは、テキスト／コンテキストの何処に<sup>イン</sup>隠蔽／<sup>アウト</sup>開示されるのだろうか。本稿は、占領期の複層的な性表象に迫る文学研究であり、映画『肉体の門』(マキノ正博・小崎正房監督、1948)に至るメディア研究の序論となる。

■ キーワード ■ 占領期、GHQ、検閲、性表象、田村泰次郎「肉体の門」

星の流れに 身をうらなって  
どこをねぐらの 今日宿  
荒む心で いるのじゃないが  
泣けて涙も かれ果てた  
こんな女に誰がした

『星の流れに』

作詞 清水みのる

歌唱 菊池 章子

1. 「パンパン」とアメリカの「影」

敗戦は瓦礫を遊郭に、淑女を娼婦へと変えるのだろうか。1947年4月22日(昭和22年)、NHKラジオ番組「街頭録音」にて、アナウンサーの藤倉修一は「ラク町おとき」の隠し撮りインタビューを敢行する。「一千万人餓死説」が出た1945年末から1949年。山手線の主要駅で「仕事」する数千に及ぶパンパン／私娼<sup>1)</sup>の存在は、生きるための歴史的必然だろう。有楽町のナンバー、「ラ

ク町おとき」こと、西田時子は語る——「ここの生活を三日続けたら、決して救われないのよ。病気になる、サツにはあげられる。だんだんとハクがついてくると、自分は一生カタギにはなれないとヤケになるのね」。そして、ふと、彼女はつぶやく——「こんな女に誰がした」、と。この吐息にも似たフレーズは、敗戦後の厭世観／諦観を代弁し、自身の境遇に対する呪詛に他ならない。だからこそ、彼女への共感、菊池章子の歌謡曲『星の流れに』<sup>2)</sup> (1947年／昭和22年)の大ヒットに接続するのだ<sup>3)</sup>。有楽町と娼婦。ラク町おときのエピソードは、占領期の性／政治学を逆照射する。

「有楽町／ラク町」、それは敗戦後の米軍支配を象徴する記号である。GHQ (連合国軍最高司令官総司令部) が丸の内一帯を接收し、本部を第一生命館 (現 DN タワー 21) に置いたことは周知だろう (そこはお堀を隔て、皇居を見下ろす最新のビルであった)。そして、銀座、日比谷に接する有楽町は、占領期の政治的・軍事的中心であり、彼らに寄生する高級娼婦が弄めく「性」のトボスであった。有楽町とは、敗戦と占領のトラウマを映し出すスクリーンであり、数多の欲望が蠢く国家のダークサイドに他ならない。この「闇」を如何に捉え、文化と歴史の中に位置付けるのか。或いは、そこに何を見て、どのように現在へと接続するのか。占領期とは、敗戦のイデオロギーやナショナリズムが噴出する時代であり、だからこそ研究は困難を極める。特にその政治文化研究はGHQの「検閲」研究と同義であり、平野共余子『天皇と接吻』(1998年)や福岡良明『「敗戦」のメディア史』(2006年)などの良書を例外として、メディア横断的な研究は看過されているのが現状である。

では我々は、如何なる地点から占領期の政治文化研究を開始すべきだろうか。本稿では、表象から欠落したワンピースに焦点を当てようと思う。何故、文学、演劇、映画など、占領期のメディアに米軍は出てこないのか。或いは、メディアが描く有楽町に、何故軍人が不在なのか。テキストが隠蔽するワンピースから、コンテキストの「闇」を暴くこと。それは、同時代の「闇」に光を当て、文化の側から戦後史を再考することだろう。この意味において、メリーランド大学の「プランゲ文庫」や国立国会図書館の「CIE 文書」の解読は、占領期の矛盾を表出させる契機であり、有効な資料となる。GHQ/SCAPのメディア「検閲」(抑圧)と「民主主義」(解放)の流布。本来であれば、相反する政策が、何故浸透し、受容されていったのか。それは、占領期表象の米軍不在、青い目の混血児やマチズモを全開するアングロサクソンの不在と如何に結びつくのか。まずは、そこ

- 1) 「パンパン」とは主として米軍を相手にする私娼であり、1950年代前半には15万人を数えた(1956年の売春防止法施行後には激減)。戦後日本の「闇」を象徴する存在だが、その独立性、自立性を指して、新時代を象徴する羨望の対象でもあった。本稿が扱う短編小説「肉体の門」に加え、映画『肉体の門』、溝口健二監督『夜の女たち』(1948)、成瀬巳喜男監督『白い野獣』(1950)など、同時代の映画によってその存在がクローズアップされた点も重要だろう。時代の抑圧と解放が、パンパンの「性」を通じて、見て取れるからだ。
- 2) 作詞者・清水みのるの「詩」は、戦中戦後の文化を映し出す好例だろう。出征兵士を送る歌『別れ船』(1940年6月)と復員の歌『かえり船』(1946年11月)など、歌謡曲を通じて、同時代が表出するからだ。
- 3) 『星の流れに』は発売と同時にヒットしたわけではない。新宿「ムーラン劇場」の風刺ショー、映画『肉体の門』の挿入歌など、1947(昭和22)年10月の発売からおよそ2年を経て、大ヒットとなる。肉体文学とパンパン映画に寄り添うかたちで、歌謡曲における「パンパン」は大衆化するのだ。以後、『星の流れに』は、女たちの苦悩を代弁する歌謡曲として、その意味を変えながらカバーされることになる。石川さゆり、ちあきなおみ、藤圭子、美空ひばり、三輪明宏などが好例だろう。

から研究を開始すべきだろう。

本稿では、「検閲」と「民主主義」という占領期の矛盾を軸に、田村泰次郎の短編小説「肉体の門」の再定位、再解釈を行う（本稿は、小説から演劇、そして映画へと繋がる占領期メディア文化論の序章であり、マキノ正博・小崎正房監督『肉体の門』（1948）のプレステージ研究である）。パンパン／私娼とは、社会が排除し、同時に必要悪として包摂した象徴的存在だろう。彼女たちは社会の底辺から、転覆的な視座を投げかける特異な存在であり、文化と政治の「コンタクト・ゾーン」<sup>4)</sup>に蠢く住人でもある。では、そこから一体何が見えてくるのだろうか。米軍不在の「肉体文学」。だが、尾西康充が指摘するように、泰次郎は「肉体の門」と同時期、「戦争文学」を書いていたはずだ<sup>5)</sup>。不在のピースは、テキスト／コンテキストの何処に<sup>イン／アウト</sup>隠蔽／開示されるのだろうか。アメリカの「影」が<sup>イン／アウト</sup>隠蔽／開示するテキストを見つめ、その複層的な関係を辿り、もう一つの戦後史を考察しようと思う。

## 2. GHQ 検閲と SM カルチャー〈縛り〉の性／政治学

コンタクト・ゾーンとは、「植民地における邂逅の空間」であり、「強要、根本的な不平等、そして手に負えない葛藤を巻き込む」トポスである（Pratt 4）。それは有楽町に限らず、米軍基地とその隣接地域を想起すれば分かりやすい。文化と文化、民族と民族、或いは国家と国家が接触、融合、相反し、矛盾が生じるトポスと言えいいだろうか。1945 年 8 月 28 日、米軍による横浜上陸から、52 年 4 月 28 日のサンフランシスコ講和条約発効に至る 6 年 8 ヶ月の占領期において、日米のコンタクト・ゾーンは常に変化し続ける。当然のことながら、それは本土を侵食し続ける支配的空間であり、米軍が男性を主体とするジェンダー強者である限り、「身体／性」の問題は無視できない。占領軍が日本を喰らう。それは例えば、米兵上陸からわずか 10 日、神奈川県に限っても、米兵による強姦事件が 1336 件も発生していた事実は、その問題の重要性を裏付けるだろう（Sanders 87）。コンタクト・ゾーンとは、支配と被支配が交差する「性」と「暴力」のトポスなのだ。

進駐軍兵士の圧倒的な性的暴力は、植民地における歴史的必然であり、否定せざる事実だろう。だが、ここで注目したいのは、その暴力に対する「肉体の防波堤」として、日本政府が自国民の身体を差し出していたことである。「特殊慰安施設」（Recreation and Amusement Association/RAA）。それは、米軍上陸前に政府が構想し、即座に実施した占領期の「性」の黒歴史である<sup>6)</sup>。女性の身体を守るために、女性／娼婦の身体を差し出す。この矛盾は、女性に対する支配と抑圧を加速するだけでなく、「女性を解放し、男女同権をめざす」とする占領軍の二枚舌を暴く好例となるだろう。

4) メアリー・ブラットの言うコンタクト・ゾーンとは、植民地主義から生起する矛盾と葛藤のトポスである。その最も顕著なトポスは、基地とその周辺だろう。詳しくはブラットを見よ。

5) 尾西康充は、肉体文学の影で見落とされてきた泰次郎の「戦争文学」に焦点を当てる。尾西は、泰次郎の「戦争」に対する意識は初期から構想されていたと指摘し、それが 1960 年代において自覚を深めたと述べる。詳しくは尾西『田村泰次郎選集』の刊行を機に」を参照されたい。

6) 1945 年 8 月 18 日、内務省警保局長・橋本政美は、各庁に宛てて「進駐軍特殊慰安施設について」という電報を出している。日本政府は、米軍上陸よりも早く、連合国軍用の慰安所設置に動いている点は無視すべきではない。占領と「性」の問題は不可分の関係であり、だからこそこの施設は短期間のうちに全国に普及するのだ。RAA に関して、吉見義明『従軍慰安婦』や千田夏光『従軍慰安婦』にも記載がある。

RAA は東京に限らず、全国に波及し、そこで従事した女性たちは、ホステスやダンサーを含めると約7万人にも及ぶ（実際には、彼女たち全てが「春」を売っていたわけではない）。だが皮肉にも、この一大歓楽施設は性病の蔓延により、約7ヶ月後の1946年3月に廃止されてしまう。「公娼」から「私娼」へ。以後、女性たちは政府のお墨付きの仕事を失い、基地周辺で客を取るようになる。その風景は、「日本全体がパンパン宿」（大宅 136）という批判を生むほど一般化し、占領期を象徴する「性」の風景となるのだ。

杉山章子が指摘するように、GHQ と日本政府の「性」の共犯関係は、RAA による女性身体の管理を通じて顕在化する<sup>7)</sup>。皮肉にもその試みは短命に終わるが、進駐直後（46 年）の米兵 46 万 5 千は<sup>8)</sup>、自身のマスキュリニティを全開し、占領下の男性身体を去勢しながら、その欲望を女性身体に向けるのだ（見方を変えれば、それは二重の「強姦」だろう）。兵士たちの「男」を受け止め、「防波堤」となるパンパンの身体は、ジョン・ダワーの言う「緩衝材」（ダワー上 142）となる——「善良」な日本女性の純潔を守るため、少数の女性を徴募し緩衝材にするというやり方は、西洋の野蛮人を扱う方法として昔から行われてきたことであった。ペリー提督がこの国の鎖国政策を力づくで廃止させるやいなや、たちまち外国人向けの遊郭が特設されたように」（ダワー上 142）。だが、この「緩衝材」の存在は、日本の男性にとって、去勢を想起させるトラウマの根でもある。

当然のことながら、RAA に顕著な「身体／性」の管理に加え、占領期政策は、管理／検閲と相性がよい。1945 年 9 月 1 日（RAA 設立の翌月）、GHQ は「民間検閲局」（Civil Censorship Detachment /CCD）を立ち上げ、9 月 11 日にはその下部組織となるメディア検閲組織「プレス・映画・放送課」（Press, Pictorial and Broadcasting Division/PPB）を加える。新聞や雑誌などの出版、演劇や芝居一般、映画や放送、そして通信全般に及ぶ総合的なメディア検閲が開始されるのだ。山本武利や川崎賢子が述べているように、CCD とは本来「秘密機関」であり、メディア検閲／統制は、GHQ が全面的に主導するものではなく、日本政府の「情報局」に依拠する間接的統制であった（山本 7、川崎 38）。9 月 19 日にはプレス・コードが出され、出版メディアが遵守すべき基準が定められ、以後、ラジオ・コード、映画等のピクトリアル・コードがそれに続く。だが、メディア・コードが順調に整備される一方で、その統制の「甘さ」は、ある事件を契機に噴出する。9 月 26 日のマッカーサー・天皇会見の報道に対し、情報局が独自判断で、その掲載禁止を各メディアに通達したのだ<sup>9)</sup>。日本政府の越権行為に対し、GHQ は態度を硬化。情報局の権利は奪われ、廃止に追い込まれることになる。マッカーサーの腹案だったメディア間接統治政策は転換され、GHQ の直接統制

7) 杉山は、RAA の成立過程を詳細に論じ、GHQ と日本政府の共犯性を指摘する。女性の「身体／性」の管理とは、進駐軍の「身体／性」の管理であり、支配の視覚的な確認でもある。詳しくは、杉山を参照のこと。

8) 1946 年に 46 万 5 千も駐留していた米兵は、48 年には 12 万 5 千まで数を減らす。駐留米兵に関しては、シェイラ・ジョンソンを参照されたい。

9) 情報局の「背信」の翌日、9 月 27 日には、戦時下の言論規制に関する諸規則、例えば、国家総動員法、国防保安法、軍機保護法、不穏文書取締法などが撤廃される。また、27 日は、天皇とマッカーサーの写真が撮影された日でもある。その有名な写真では、天皇とマッカーサーのジェンダー的關係が興味深い。なで肩で小柄の天皇は、モーニングを着た「女／妻」であり、軍服を着たマッカーサーは腰に手を当てた威厳ある「男／父」である。日本の古き「父」は女性化し、新たな「父」は絶対的な強者として君臨するというこの写真の意味は重い。「天皇の女性化」に関しては、シロニー、ペン＝アミーの論考を見よ。

へと移行するのだ。以後、検閲の指令塔は、「民間情報教育局」(Civil Information and Education Section/CIE)と「民間検閲局」(CCD)が担い、メディア規制は強化される。45年9月から開始された統制システムは、49年10月のCCD廃止、PPB消滅によって形式上は終結するが、プレス・コードは残り、検閲の影響力は残存する。

検閲のスタイルは、指針としての「キーログ」(Key Log)に基づく。プレス・コードが具体性に欠ける条文の列挙故、現場に即した検閲の指針が求められ、キーログが作られたのだ。メディア検閲とは、インテリジェンス収集の役割を担い、占領期の統制を容易にする。それは「思想」と「思考」の去勢であり、CCDとCIAが協力関係にあったように、「情報」はいわば弾丸であり、検閲はその弾丸を装填前に除去する行為に等しい。47年5月のPPBの自己評価では、検閲の浸透に関して、次のように書かれている——「現在、全ての日本中の新聞出版、映画、放送のチャンネルは、占領やその目的に有害な情報、虚偽や連合国への破壊的な批判だけは、流してはならない」(山本17)。キーログの事前検閲。それは、多くの雑誌をも狙い撃つ。左翼系では『中央公論』『改造』『世界』、右翼系では『不二』『彗星』などが好例だろう。出版社の事前検閲は、岩波書店、平凡社、中央公論社、改造社、河出書房など多岐にわたる(山本304-310)。そして、出版用紙も配給制故、独自出版は困難を極める(用紙は、51年5月まで統制物資であった)。当時は「紙」ですらも政治が関与し、言論の自由を阻害していたのだ。この状況下、配給制外の再生紙である「センカ紙」が、エロ／グロ文化を担うアンダーグラウンド・マガジン、カストリ雑誌の出版を支えることになる。

メディアは政治を検閲し、アンダーグラウンド・カルチャー(アングラ文化)は「性」を解放する。占領期の極端な政治文化は、検閲が生み出したオモテとウラであり、そこには奇妙な捻れが生起するだろう。言論が「キレイ」に民主主義を伝える一方で、アングラ文化では、エロ／グロやSMが全開するからだ。言論を〈縛り〉、女性を〈縛る〉。占領期の「清潔」なメディアと、SM的アングラ文化。二重化する〈縛り〉とその表象において、女性の「身体／性」は結節点となり、大衆の欲望の焦点となる。例えば、カストリの第1号『猟奇』(1946年10月)が、2万部を即日完売したことを見ればいい。或いは、47年1月の新宿、帝都座五階劇場(丸木砂土が開場)の「額縁ショウ」、浅草ロック座や浅草フランス座のストリップ劇場も忘れてはならない。そして、空気座による「肉体の門」の舞台化や、そのヒットに伴う日本各地の巡回公演、そしてマキノ正博による映画化もその系譜に連ねることが可能だろう。アングラのターゲットは、女性の「身体／性」であったのだ。

猟奇、額縁、ストリップ、SM。検閲の裏側で生起したアングラ文化は、〈縛り〉に接続する。しかしながら、女性の「性」の商品化、スペクタクル化は、「占領」というトラウマを引き受ける限りにおいて、二重化／複層化するのだ。例えば、パンパン／私娼の(現実と表象の)増殖は、メディアが映さない米軍／米兵を逆照射しながら、歪んだ欲望をアングラに求める占領期のメンタリティを代弁するだろう。GHQの民主化政策である「3つのS」(セックス、スポーツ、スクリーン)は、青春と民主主義を代弁する「接吻映画」の製作を促す一方で、売春、SM、アングラ文化を煽る。両者はまさしくコインの表裏であり、「キスする」女性と「縛られる」女性が、オモテとウラで共存するのだ。そして、占領／敗戦の去勢イメージは、女性に対するサ的欲望に転移し、暴力

的な支配・被支配の表象を生むだろう。天野知幸が論文「〈肉体〉の増殖、欲望の門」で指摘するように、「額縁ショー」から「肉体の門」の舞台に継承されるサディスティックな演出とは、「グラン・ギニョル」的残虐性と扇情性と同義であり、観客の性的欲望を刺激する過激なものであったからだ（天野 140-145）。特に、マヤの〈縛り〉が劇場パンフレットの表紙となる「肉体の門」では、その扇情性は顕著である。グラン・ギニョル的、SM 的スペクタクルが、女性身体を通じて全開するのだ。こうして、アングラ文化は、かたちを変えて反復し、大衆文化の欲望の回路へと回収、浸透することになる<sup>10)</sup>。さらにいえば、ここで注目すべきは、女性身体を通じてコンタクトする二つの「身体」である。可視と不可視の身体。それは、占領下の日本男性たちのトラウマ的身体（去勢された身体）と、米軍／米兵のマスキュリンな身体（<sup>アブセント・プレゼンス</sup>不在存在の身体）に他ならない。二つの身体は、女性身体、或いはパンパンを媒介し、表裏の関係となる。

「肉体文学」と扇情的なアングラ文化。それは、占領期の二重の〈縛り〉が生み出した性／政治学の帰結であり、その結節点には女性身体がある。性病が「性」の管理を無効化し（RAA と CIE）、メディアが「性」の複層化を促し（検閲とアングラ）、サド／マゾ的「性」への欲望が渦巻く。占領は多くを奪い、喪失感を与える一方で、そこに強烈な渴望を生起させるのか。「性」と「生」への渴望。田中雅一は次のように述べる——「抑圧されていたもろもろが一斉に無志向的かつ全志向的に簇生する。敗戦のショック、というよりは長期総力戦終結後の目的を喪失した空白感の上に、戦勝国アメリカの文物が降りそそぎ、価値観の転換が促進され、占領下モダニズムとでもいふべき特有の情調が渦巻く。それはむしろ「発情期の精神」と形容すべきかもしれない」（田中 132）。アメリカがもたらした価値観の転換。それは、まさに「発情期の精神」だろう。そして、その中から〈肉体〉が出現するのだ。では、その〈肉体〉を描く泰次郎「肉体の門」とは如何なるテクストなのだろうか。

### 3. コンタクト・ゾーン「有楽町」—<sup>コロニアル・ボディ</sup>植民地的身体と反逆する女性たち

敗戦による秩序／思想の崩壊を受けて、旧価値観や道德の欺瞞を暴く「肉体文学」とは、「思想」を否認し、「肉体」に新しい価値観を見出すという「身体的」な覚醒と同義であった。「生」への渴望は、敗戦による思想的「空白」を埋めるため、確固とした身体へと接続する。坂口安吾が「墮落論」（『新潮』1946. 4）で、旧来のイデオロギー批判を行ったのに対し、泰次郎はあくまで「肉体や欲望に対する絶対的な信頼、肯定を自らのラディカルさの表現として選択した」（天野 139）と言えるだろう。泰次郎は、評論「肉体が人間である」（『群像』1947. 5）で次のように書いている——「『思想』への不信は徹底的である。私たちは、いまやみづからの肉体以外のなにものも信じ

10) アングラ文化への欲望。それは、戦後の日本にのみ限定されない。例えば、第一次世界大戦後のパリはどうだろう。戦後の好景気、バブルが生み出す好景気は、1920 年代のモダニズム文化を開花させ、繁栄のパリを印象付ける。だが、その裏側で、数多の傷痕軍人が街に蠢いていた事実を我々は看過すべきではない。テクノロジーの戦争が生み出した「<sup>バイプロダクト</sup>副産物」。それは、身体修復であり、結果、手足を失い、顔にダメージを受けた兵士が生き残る悲劇を生む。何故『ノートルダムのせむし男』（1923）のカシモドや『オペラ座の怪人』（1925）のエリックが生まれたのか（彼らはメタフォリカルな傷痕軍人に他ならない）。戦後に生起するグロテスクとは、まさに戦争の「<sup>バイプロダクト</sup>副産物」であり、「<sup>アフターマース</sup>余波」だろう。

ない。肉体だけが真実である。肉体の苦痛、肉体の欲望、肉体の怒り、肉体の陶醉、肉体の惑乱、肉体の眠り、——これらのことだけが真実である。これらのことがあることによって、私たちははじめて自分が生きていることを自覚するのだ」。(『選集 5』188)

だが「肉体」は、占領期のアングラ文化の只中で、その意味を複数化する。文学、演劇、そして映画。メディアが反復する「肉体」は、大衆文化の欲望と混ざり合い、霧散するだろう。その受容のプロセスにおいて、本来、思想としての「肉体」は、扇情的な「肉体」へと変貌を遂げる。同時に、田村泰次郎という作家の「戦争文学」は忘却され、「通俗作家」というレッテルのみが流通するのだ<sup>11)</sup>。では、我々は複数化する「肉体」に対し、如何にアプローチすべきなのだろうか。泰次郎自身が述べているように、それは肉体／身体に対する絶対的な肯定と信頼であり、旧来の価値観からの脱却、或いはパラダイム・チェンジであることは理解できる。「肉体」は、GHQ と占領期の欺瞞を暴く、文字通り身体を張った装置だろう。民主主義への暴力的な接近に対し、肉体／身体賛美とは自己信頼であり、未来への希望である。だが、その「肉体」とは、敗戦のスティグマが刻まれた二重化した身体ではなかったか。或いは、それは「強姦」され、縛られた身体ではなかったか。我々は、再度、泰次郎のテキストにおいて肉体／身体の意味を確認する必要があるだろう。

「肉体文学」に刻まれる見えざる「影」。それは、「パンパン」表象が隠蔽<sup>イ</sup>／開示<sup>アウト</sup>するアメリカの「影」に他ならない。短編「肉体の門」の舞台。それは先にも述べたように、GHQ 本部近郊の有楽町界隈（テキスト的に言えば有楽町から勝鬨橋までの区域）であり、いわゆる「オンリー」や「バタフライ」のパンパンにとって、白い身体に出会う必須のトボスである。だが、「肉体の門」では、「性」の買い手である高級士官や一般米兵、そしてドル紙幣は出現せず、白い身体と経済活動は見えてこない。不在の米軍と偏在する「パンパン」。これはいささか奇妙ではないか。我々は「パンパン」という記号に、米兵の存在を逆照射し、「有楽町／ラク町」をコンタクト・ゾーンとして再定義すべきだろう。重要なことは、扇情性や大衆性という視座で「肉体の門」を〈縛る〉ことではない。パンパンたちの SM 的スペクタクルこそが、占領期の支配・被支配という〈縛り〉をメタフォリカルに映し出すのだ。縛られた女性身体。そこに占領期の性／政治学が生起する。

テキストの冒頭には、身体に接続する複数の欲望が出現する。「肉体の門」は、パンパンのマヤが、グループの掟を破り、伊吹新太郎との愛に目覚める直線的なプロットを有する。だが、彼女たちは常に活力に満ちているわけではない。むしろその身体は、他者の欲望が投影される「スクリーン」であり、象徴的な「空白」<sup>タブラ・ラサ</sup>である。例えば、浅田さんの身体はどうだろう。女性らしさとは無縁の身体に対し、泰次郎は「十九歳にしては皮膚に艶がなく、筋肉に脂肪の乗りがうすかった。身体の青白さは、少し病的のよう」(28)と書く。彼女は「関東小政」の文字を上膊に刻み、「神秘的な力」を欲しがらる。

せんは人間の皮膚に、さまざまの絵や文字が刻まれることが珍らしいのだ。そういえば、彫留へ来る男たちは、みんなそうなのにながいない。恰度、原始人が、自分の身体を刺青で飾るよ

11) 大村彦次郎は、泰次郎の文学が通俗化する様を次のように要約する——「田村のなかに戦前から萌芽し、戦地で成熟した肉体信奉の思想は、作家の思惑とは離れてひとり歩きし、通俗化されたイメージを帯びて、世間に伝播されていった」(大村 51)。

うに、それが知能の低い子供のような単純なよろこびだった。それとともにまた、原始人や虎や、豹や、熊と闘うには、人間以上の能力をそなえたなにものかに化けなければならないのと同じように、せんのその日その日が闘いである生き方には、自分よりももっと強い、逞ましい神秘的な力を本能的に欲しがった。(29)

刺青は、第二のジェンダー／皮膚なのか。せんは「病的」で少年のような身体に、他者の名を刻み、強者との同化を夢想する。彼女の身体とは「空白」であり、「青白い」ノートに他ならない。また、このことは、「ボルネオ・マヤ」というニックネームに象徴される植民地的記号とも無縁ではない。とはいえ、せんやマヤの同一化とは、皮肉な振る舞いだろう。それが清水の次郎長の子分、義侠・任侠の侠客、小政の名であれ、帝国日本の占領地「ボルネオ」の名であれ、日本の「男根」的残滓を身にまとう彼女たちは、結局のところ、占領軍に自らを差し出す従属／隷属者に過ぎないからだ（せんの少年のような「青白い」身体が、白い身体に抱かれる様を想起すれば、それは同性愛的、少年愛好者的ではないか）。実際、せんのグループには、あとで加入する菊間町子を除くと、艶めかしい身体は存在しない。彼女たちは、皮膚や名前を纏うことで、新しい自分を手に入れようとしているのだ。

泰次郎は、白い身体を消去し、「青白い」身体を「獣」と書く。そして、その「獣」が狙うのは、脆弱な日本人男性である——「背広のサラリイマンであろうと、復員服の闇屋であろうと、闇肥りの年輩者の工場主であろうと、みんなこの猛獣たちの獲物である」(30)。支配・被支配の逆転。それは、米兵とパンパンの関係を、「獣」と「サラリイマン」(或いは、闇肥りの年輩者)の関係へと置換し、アメリカの影を隠す。男女のジェンダーを逆転させ、脆弱な男たちと獣としてのパンパンの強調は、彼女たちからリアルな「性」を奪うことになるだろう。「獣」の描写はさらに続く——「彼女たちは廃都の獣である。彼女たちは地下の洞窟で眠り、喰らい、野天でまじわる。そのまだ青い巴旦杏のような肉体は、なにもをも恐れない。むごたらしく、強い闘いの意欲だけがあふれている」(31)。「廃都の獣」とは、戦後の日本女性たちの「反逆」を暗示する。キーログやプレス・コードが支配する占領期の出版文化において、直接的なGHQ批判はあり得ない。検閲に対して、泰次郎は自身の考えを述べていないが、有楽町という「戦場」に巣くう獣たちに、反逆のアクションを託しているのは明らかだ。女性たちの反逆。それは、脆弱な日本／男を喰らう獣性の目覚めであり、かつての軍国主義批判であり、占領期という「現在」に対する呪詛である。興味深いことに、「肉体文学」における女性たちの反逆は、同時期に製作された「啓蒙映画」にも見て取れる。木下恵介監督『大曾根家の朝』(1946)や溝口健二監督・田中絹代による女性解放三部作(『女性の勝利』(1946)、『女優須磨子の恋』(1947)、『わが恋は燃えぬ』(1949))が重要だろう。「あの子を死に追いやったのは、あなたです。あなた方の軍国主義です」——杉村春子のセリフに集約される軍国主義批判は、「肉体の門」の少女たちの反逆と呼応する。女性たちの「日本／男性」喰い。それは、ファリクな権力そのものへの批判であり、決別宣言だろう。メディアを通じて反逆する女性たちは、ときに怒りを爆発させ、ときに「こんな女に誰がした」と、自身の境遇を嘆く。文学と映画、その交差から見えてくる反逆は、獣化する女性イメージを生起させ、米兵と現地妻というオリエンタルな蝶々夫人物語には接続しない。女性たちの「群れ」。それは、掟の支配する限定的な



レズビアン共同体だろう。彼女たちが守るべきは、「男」ではないのだ。

#### 4. レズビアン共同体と SM スペクタクル

女性たちの共同体とは、束の間の「ユートピア」に他ならない。彼女たちは精神的な絆を重視し、売春に誇りを見出す。紙屋牧子が指摘するように、「肉体の門」には、ポン引きやヒモなど、売春を管理する男たちが不在なのだ（紙屋 159）。だからこそ、彼女たちは自分たちの掟にアイデンティティを見るのだろう——「たとえば、正当な対価をもらわずに、自分の肉体を相手にあたえる者が一人でもあれば、それは自分たちの共同生活の破壊者である。そんな行為は自分たちのしょうばいを脅かすことになるからだった」（31）。かりそめのユートピア。それはかたちを変えたレズビアン共同体であり、女たちの地獄でもある。

掟は暴力に転移し、ファリックなアクションへと変貌する。掟を破って学生と恋仲になった仲間の一人が、「丸刈り」になった例はどうだろう。髪を切るという逆説的な去勢。同性間のセクシュアルな関係性を持たずに、精神的な繋がり／掟に依拠するレズビアン共同体は、柔軟性を欠いた暴力支配の別名であり、ホモソーシャルな軍国主義を皮肉なかたちで反復するのだ。ホモソーシャルな軍隊が、せんたちのパンパン共同体へと変奏し、意味がずらされていると言えいいだろうか。当然、この危うげな関係性は、伊吹新太郎の参入と、三度の SM 的スペクタクルを通じて瓦解する。暴力を基盤とするユートピアは、軍隊の形象を帯びるほどに崩壊へと接近するのだ。

「肉体の門」のステロタイプな特徴とは、残虐性とエロティシズムであり、〈縛り〉とリンチの風景だろう。だが、何故女性への加虐が求められるのだろうか。先にも述べたように、グラン・ギニョルの演出は、メディアを変えながら変奏し、「肉体の門」を大衆へと開く。そのプロセスにおいて、テキストは一体何を〈縛って〉いたのだろうか。言い換えれば、読者／観客は、〈縛り〉の向こう側に何を見ていたのだろうか。パンパンを〈縛る〉。それは、パンパンを透かして見えてくる GHQ に対する加虐であり、アメリカを〈縛る〉ことに他ならない。アメリカの「影」を凌辱するとは、去勢からのメタフォリカルな脱却だろう。「肉体の門」は、少なくともこの思考回路を開き、大衆へと流通したはずなのだ。だからこそ、インテリがこぞってみる SM 劇となり、全国へと波及するメッセージとなる。では、実際にテキストの〈縛り〉を見ていこう。

一度目の縛りは、共同体の掟を破った菊間町子に対する制裁である。「伊吹を中心に眼には見えない、一つの雰囲気」（38）が作られ、彼の身体をアンタッチャブルとすることで、せんたちは共同体の秩序維持を図る。それはまるで、「一疋の牡犬をまんなかにして、四疋の牝犬がお互いに睨みあっている」（44）状況。町子はそれを壊し、結果、見せしめとなるのだ。

やがて町子は仕方なしに、帯をとき、着物を脱いで、全裸となった。町子の裸体は、彼女のしごきや帯締めで、広間のコンクリの柱にくくりつけられた。まだ子供のない人妻らしく、白い脂肪の過度に乗った町子の全身が、みんなの前に現われると、誰も一瞬間だまってしまった。マヤは戦慄が自分の背筋に走るのを覚えた。ほのあかりで、いま男と別れてきたばかりの官能の火照りが、全身を蛍の火のように鋭くかがやかせていた。（39）

エロティックな裸体は、少年のようなせんたちの脱性化した身体の特極だろう。レズビアン共同体において、金銭ナシの男女の「性交」はタブーであり、憎悪と嫉妬を誘発する。「性」を〈縛る〉。その試みは、快楽の禁止であり、ユートピアのリミットでもあるだろう。だが、性の検閲は、皮肉にもせんたちの無力を露呈し、町子の魅力を全開するのだ。そして、「官能の火照り」、或いはそのスペクタクルは、彼女たちを戦慄させ、視線を奪う。直接的なリンチと、視線のレイプは、町子の身体で交差する。

ここで注目すべきは、女性たちから伊吹へと、視座が譲渡されることだろう——「菊間町子がいまにも呼吸の絶えるような苦痛の叫びをあげて、髪をふりみだし、蟬のように柱にしがみついているのを、伊吹新太郎は、立って歩くと腿の傷のまだすこし痛むのをこらえながら、さっきから壁にもたれて、それを見ていた。苦痛に死にそうに狂っている町子の肉体のあやしさは、彼の眼をみはらせた。畜生、——いい身体してやがる、——彼は口のなかでつぶやいた。ああ、早くこの傷が癒らねえかなあ、——彼の胸はいらだちでいっぱいになった」(40)。町子の SM 的スペクタクルは、女性たちの性行為を表象／代理する。町子とせんたちの関係は、支配・被支配という暴力的関係を超え、その官能性によって一体となる。刹那、視座は、伊吹のものとなる。彼は「畜生、いい身体してやがる」と、ヘテロセクシュアルな反応を示しながら、町子の裸身を凝視し、弾丸で去勢された身体にいらだつのだ。

伊吹とは一体何者なのだろうか。彼は生命の「息吹」を体現する存在であり、マスキュリンでありながら、傷ついた身体を有するキメラである。せんたちが客とする「サラリイマン」とは異質であり、その強烈な視線は、スティグマとしての傷を補完し、メタフォリカルな男根となるのだ。ボルネオ・マヤに顕著のように、彼女たちがある意味でノーマルな規範へと帰属するのに対し、伊吹は逸脱し続ける。その例が、二度目の〈縛り〉、牛の解体だろう。血しぶきを受けた伊吹の顔は、赤く染まる。牛の解体とは、男性性の回復の儀式であり、メタフォリカルなレイプに他ならない。だからこそ、そのアンモラルな官能は、脈打つ鼓動にシンクロする——「牛は首も、肢も、自由を奪われているので、全身を、心臓になったように脈打たせている。ぐっとむき出した怨めしそうな白眼を見ると、彼女たちはぞっとした、一層、手に力がはいった。惨虐な快感のようなものがあつた」(47)。

牛に対するサディスティックな感情は、奇妙にも共同体の女性たち自身のマゾヒスティックな欲望へと反転する。「喰う」から「喰われる」へ。或いは、「喰われない」へ——「その子の扮した赤鬼が、悪者であっても、こんな鬼にならば、食われてしまってもいいと思った」(47)。町子の官能は、牛の惨劇へと転移し、伊吹は暴力的に覚醒する（実際、牛の解体は、アメリカに対する暴力的復讐劇だろう）。結果、彼はマヤを抱き、「憎悪」を彼女にぶつけるのだ。

いきなりボルネオ・マヤの両肢をつかんで、押しひろげ、蛙を裂くようにその股をひき裂こうとした。マヤの幸福そうなうめきを聞くと、一層、彼はいらいらした。伊吹はこの生意気な小娘を責めて、責めて、ぐうの音もでないまでに責めさいなまなければ、自分の憎悪はおさまらないと直感した。あの火線で機関銃を操作しているときの、闘志と本能的恐怖とで、気の遠くなるような生命の充実感と同じ感覚を、今彼は感じた。(54)

パンパン／マヤとは、アメリカの「影／女」であり、敗戦を視覚化する存在である。「影」を抱き、アメリカを女性化するという思考。それは、牛の解体と連動し、伊吹の覚醒を促す。だが、一方で、マヤは「幸福そうなうめき」を出す。果たして、これは何の光景なのだろうか。伊吹は性交に戦場を幻視し、マヤはレイプに快楽を覚え、「完全な一匹の白い獣」へと変貌する。「肉体の門」のサブテキストは、明らかに反体制的なものだ。

「肉体」の享受、或いは賛美とは、国体思想としての精神ではなく、GHQ がもたらした占領期の解放思想に他ならない。「肉体の門」とは、本来、「近代の門」であり、身体と民族の解放と同義だろう。だが、マヤが性的な快楽に目覚め、かりそめの自由を享受する一方で、伊吹は「肉体の門 第二部」に至るまで、その危険なセクシュアリティのため、幽閉を余儀なくされる。マヤの性の目覚めは肯定され、伊吹は物語から退場しなければならない。泰次郎は「肉体の門」を反体制へと全開しない。伊吹をテキストに〈縛る〉ことで、物語を軟着陸するのだ。ならば、このテキストの「検閲」は、何処に接続するのだろうか。

## 5. 「性」を〈縛る〉ーキリスト教と民主主義

何故、マヤたちパンパンは、レズビアン的ユートピアを解体し、ヘテロな「女」として更正するのだろうか。文学から演劇、そして映画へと流通するなかで、検閲が導いた結論は、「闇の女」に社会的な役割を持たせ、社会へと復帰させることであった。例えば、川崎が指摘するように、早稲田大学「現代文学会」の公演では（CIE 文書）、女たちを教化する「牧師」と「婦人警官」が加えられ、マヤの更正が強調されている（川崎 144）。パンパンの「更正」。それは、CIE による映画スタジオへの要請でもある。「肉体文学」と同時代のパンパン映画においても、官能性や享楽性の否定は不可避だったからだ（平野 129-130、紙屋 170）。

アメリカの「影」は、パンパンに対して慈悲深く、寛容である。占領下のマグダレーナたちは、娼婦ゆえに聖なる存在となり、キリスト教的救済のディスコースへと回収される。当然、それが「更正」への道なのだ。

マヤはたとい地獄におちても、はじめて知ったこの肉体のよろこびを離すまいと、心に誓った。だんだんうすれていく意識のなかで、マヤは、いま自分の新生がはじまりつつあるのを感じていた。

地下の闇に、宙吊りのボルネオ・マヤの肉体は、ほの白い光の暈につつまれて、十字架の予言者のように荘厳だった。（54）

マヤの「新生」とは、キリスト教的覚醒の別名だろう。パンパンたちは、「近代への門」の向こう側に、キリスト教的民主主義を準備する。娼婦からの更正、そして良妻賢母への予告。「肉体の門」は、アメリカ的価値観への同化を迫り、罪と受難と救済の道を連れ、と迫るのだ。当然、これは「肉体」の解放ではない。占領下の女性身体は、敗戦の罪を背負い、悔い改めることで「キリスト人」となる。自筆原稿を検討した尾西が言うように、泰次郎はクリスチャンではなく、主たる関心

も示していない（尾西 296）。だが、泰次郎はキリスト教的民主主義の果てに、パンパンがアメリカ化するプロセスを描く。マヤの「新生」と民主主義の「光」。それは「十字架の預言者」への同化を促し、伊吹を刑務所に「幽閉」し、「性」を〈縛る〉。これは「肉体文学」のリミットであり陥穽、或いは検閲そのものである。

パンパンがアメリカの「影」を代弁するように、敗戦のトラウマ／スティグマを引き受ける男性身体は、帝国日本の亡霊に他ならない。泰次郎は、伊吹の暴力性に対し、検閲／幽閉することで、戦争の記憶から距離を取る。つまり、マヤをキリスト的な光で導きながら、伊吹を闇へと隔離するわけだ。少なくとも「肉体／身体」は、『群像』の評者たちが示した「頽廢ではなく健康ですね」（伊藤整）という単純なものではなく、占領期のイデオロギー、或いは性／政治学が交差するトボスであり、複数の欲望が投影されるスクリーンであったことは確かだろう。

アメリカの「影」は如何にして、戦後文学を形成するのだろうか。そのワンピースは、不在の米軍を通じ、「肉体文学」で開示する。焼跡の「イエス」。それは、民主主義とキリスト教化を目論むGHQの政策であり、「性」を〈縛る〉モメントとなる。敗戦が刻むアメリカという不可視<sup>タトロー</sup>の刺青。その考察は、まだ始まったばかりだ。

\*本稿は、関西学院大学先端社会研究所公募プロジェクト「基地とエロス－排除と包摂の戦後日本映画研究」の成果である。

#### 参考文献

- Johnson, Sheila K. *American Attitude Towards Japan 1941-1975*. American Enterprise Institute for Public Research, 1975.
- Pratt, Mary Louise. *Imperial Eyes: Travel Writings and Transculturation*. London: Routledge, 1992.
- Sanders, Holly Vincele. *Prostitution in Postwar Japan: Debt and Labor*. Ph. D. Thesis submitted to Princeton University, 2005.
- 天野知幸「『救済』される女たち－被占領下で観られた「肉体の門」」『丹羽文雄と田村泰次郎』濱川勝彦・半田美永・秦昌弘・尾西康充編（学術出版会、2006）261-281 頁
- 「〈肉体〉の増殖、欲望の門－田村泰次郎「肉体の門」の受容と消費」『日本近代文学』75(2006): 135-150 頁
- 荒井英子「キリスト教界の「パンパン」言説とマグダラのマリア」『占領と性 政策・実態・表象』恵泉女学院大学平和文化研究所編（インパクト出版会、2007）149-178 頁
- 大宅壮一「日本は淫売国だった」『丸』5(1953): 134-36 頁
- 大村彦次郎『文壇栄華物語 中間小説とその時代』（筑摩書房、1998）
- 奥田暁子「GHQの性政策－性病管理か禁欲政策か」『占領と性 政策・実態・表象』恵泉女学院大学平和文化研究所編（インパクト出版会、2007）13-43 頁
- 尾西康充『田村泰次郎の戦争文学 中国山西省での従軍体験から』（笠間書院、2008）
- 「『田村泰次郎選集』の刊行を機に－「肉体の悪魔」自筆原稿の検討－」『日本近代文学』73(2005): 292-302 頁
- 紙屋牧子「占領期「パンパン映画」のポリティックス－1948年の機械仕掛けの神」『映画と身体／性』斉藤綾子編（森話社、2006）151-186 頁
- 川崎賢子「GHQ 占領期の出版と文学－田村泰次郎「春婦伝」の周辺」『昭和文学研究』52(2006): 38-48 頁
- 斉藤綾子「カルメンはどこに行く－戦後日本映画における〈肉体〉の言説と表象」『ヴィジュアル・クリティシズム 表象と映画＝機械の臨界点』中山昭彦編（玉川大学出版会、2008）83-126 頁

- シロニー、ベン＝アミー『母なる天皇』大谷堅志郎訳（講談社、2003）
- 杉山章子「敗戦と R・A・A」『女性学年報』9(1988)：34-46 頁
- 田中雅一「コンタクトゾーンとしての占領期ニッポン―「基地の女たち」をめぐって」『コンタクトゾーンの人文学 第Ⅰ巻』田中雅一・船山徹編（晃洋書房、2011）187-210 頁
- 田中眞澄「黒澤明と木下恵介の源泉―被占領期から復興期へ」『キネマ旬報』（1998. 8）132 頁
- 田村泰次郎『田村泰次郎選集 第3巻』秦昌弘・尾西康充編（日本図書センター、2005）
- 「肉体が人間である」『田村泰次郎選集 第5巻』秦昌弘・尾西康充編（日本図書センター、2005）187-191 頁
- 「肉体文学の方向」『田村泰次郎選集 第5巻』秦昌弘・尾西康充編（日本図書センター、2005）197-199 頁
- ダワー、ジョン『敗北を抱きしめて 第二次大戦後の日本人（上下）』（岩波書店、2004）
- 千田夏光『従軍慰安婦』（講談社文庫、1984）
- 平野共余子『天皇と接吻 アメリカ占領下の日本映画検閲』（草思社、1998）
- 福岡良明『「反戦」のメディア史 戦後日本における世論と輿論の拮抗』（世界思想社、2006）
- 山本武利『GHQ の検閲・諜報・宣伝工作』（岩波書店、2013）
- 吉見義明『従軍慰安婦』（岩波書店、1995）

**Sexuality and Bondage :**  
GHQ, Censorship, Tamura Taijiro's "Gate of Flesh"

TSUKADA, Yukihiro  
(Kwansei Gakuin University)

**Abstract**

In this article, we examine the sexual representation in the GHQ occupation period by focusing on Tamura Taijiro's short novel, "Gate of Flesh." Various social elements of Japan's defeat and allied occupation are explored and contextualized in the novel. Especially, the prostitute, "Pan Pan" is the blank screen in which the contemporary desire is reflected. And it can be interpreted as the symbol of the social exclusion and inclusion in that era. This article also deals with the American "shadow" as the absent presence in Taijiro's "Gate of Flesh", and argues that this text is the vertex of the sexuality and politics from the cultural point of view.

**Key words :** Occupation era, GHQ, censorship, sexual representation, Tamura Taijiro's "Gate of Flesh"